

論文要旨

香港における BL 漫画の流入と発展

現在、日本から発祥した BL 文化（男性同士の愛を扱った女性向けのマンガや小説）は世界中に広がっている。それぞれの国での BL 文化の広がりについての研究はある程度進んできたとはいえ、海外での BL の受容史についての研究は、まだ十分になされているとは言えない。特に香港は日本漫画の受容史そのものについての研究も出版物もほとんどなく、まして、香港における BL 漫画受容史の学術的な研究は皆無と言っていい。

本研究では、今まで誰も明らかにしていない日本の BL 漫画の香港での受容史と、その独自の発展過程を明らかにしたいと思う。調査の結果、その発展過程には、香港の同人誌活動の発展史が深くかかわっていることが明らかになってきた。しかもその発展過程は、日本における同人活動の発展過程とも重なる部分がある。

本研究は香港における同人活動や BL 漫画の発展にたずさわった当事者や関係者へのインタビューを調査の基盤とする。インタビューで得られた情報をもとに、主に 1980～90 年代のアニメ・漫画雑誌や、同人誌等に掲載されたインタビューや記事などとインタビュー内容を照らし合わせて、香港の同人文化の歴史・BL 文化受容史を整理する。

本研究は 6 章で構成され、それぞれの内容は以下となる。

基本的には、日本漫画そのものが香港にどのように入ってきたかをまず記述し、その中に、女性向けに男性同士の性愛を描いた作品＝広い意味での BL（中国語では耽美）作品が含まれていたことを指摘し、そうした作品が香港の読者に受容され、やがて同人作品として香港の作家によっても描かれるようになっていく過程を跡づける。

第 1 章では 1960 年代末から 80 年代前半にかけての日本漫画の流入について述べる。香港における日本漫画ブームは、1967 年からの日本アニメの香港地上波放送をきっかけにして始まった。さらに香港で有名な児童向けの雑誌『児童樂園』が 1973 年から「ドラえもん」の連載を始めて大人気になったこともブームを加速し、香港における漫画海賊版事業の発展につながった。加えて、60 年代末から相次いだ日本のデパートの香港での開店と 70 年代からの日本文化ブームがあいまって、日本語が読めなくても日系百貨店の日本書店を訪れる人が増え、日本漫画を立ち読みする熱心なファンもあらわれた。そうした海賊版や、あるいは日本書店で立ち読みされた漫画の中には、竹宮恵子『風と木の詩』などの「少年愛」作品もすでに含まれていた。

第 2 章では 1980 年代、『漫画周刊』という海賊版漫画タブロイド紙の刊行に伴う、同人ネットワークの始まりについて述べる。第 1 章で述べた日本アニメ・漫画ブームを背景にして、1981 年に『漫画周刊』が創刊された。その投稿欄から、香港の同人活動は発

展してきた。『漫画周刊』の投稿欄をベースにして1984年に創立された香港初の同人サークル「香港アニメ漫画の友社」（「の友社」）を発端とし、香港の同人活動の歴史が始まった。「の友社」につづいて成立した少女漫画系同人サークル「千年会」の活動がきっかけとなり、より多くの読者が「少年愛」作品と接触。その流れが後に、1992年に出版された香港初の耽美同人誌『少年邪』の出版へとつながっていく。

第3章では、1980年代末から1990年代における同人誌流通の変化について述べる。「の友社」や「千年会」の活動に触発されて生まれた他のたくさんのサークルと共に、1990年、香港初の同人サークル組織である「香港漫画自主協会」（自協）が結成された。1990年から1992年までの第1次同人誌ブームが起こった後、1993年から1995年まで、香港同人誌界は「氷河期」を迎えた。しかしそうした中で、謝寶裕・草民小堅といった同人作家や、「火狗工房」「U.V.R.Z.」などの同人サークルの努力が、香港初の同人誌即売会「同人祭96」の開催に結び付いた。その後、商業出版社の集まりである香港漫画協会が主導した同人誌即売会「漫人墟98」が開催されたが、結果は失敗した。その経験を経て、同人サークル芝麻館から発展した香港の同人組織「TG坊」は日本の同人誌イベント「コミックワールド」を主催するデリーター株式会社（当時は「S.E.株式会社」）と組み、1998年8月「コミックワールド香港」を開催した。この後、ようやく香港で同人誌即売会というイベントが定着していくことになった。

以上、第1～3章は、香港における「少年愛」作品を含めた日本漫画の流入に起源をもつ同人誌活動の発展と、それに伴うプロを目指す作者によるオリジナル作品を基本とする流れの中で、「耽美」漫画が誕生するとともに、同人が組織化されていく過程を扱う。

続く第4～6章では、それとは別の流れである、新しく、遊び要素が強く、より直接的に「男同士の恋愛」を描写した「やおい・BL（狭義）」漫画の香港への流入の過程とその後の発展について述べていく。

第4章では最初に、香港への日本の二次創作文化の流入過程について述べる。まず香港の『天龍版・聖闘士星矢』は、同じく海賊版である台湾の『金歡樂』の出版モデルを模倣し、日本の『聖闘士星矢』本編と併せて日本の同人作家によるパロディ作品を同一単行本内に収録・出版することにより、香港に「二次創作」や「やおい」という創作概念を流入させることになった。つづいて『A-Club』というアニメ・漫画情報誌の投稿欄を通じて、「二次創作」の風潮はさらに広がりを見せた。この流れは、香港の80年代から90年代中盤までのオリジナルを中心とした同人界に新たな風を起こし、とくに2000年代に入ると、「二次創作」特に「やおい」の創作ブームにつながっていった。『天龍版・聖闘士星矢』『A-Club』いずれも80年代後半の発刊である。

つづいて、80年代中盤からの香港での貸本屋ブームを背景に、90年代初頭に台湾から

始まった「絶愛」ブームが香港にまで広がり、これまでの「男性同士のホモソーシャルな絆」を楽しんでいた読者は「男性同士のホモセクシャル」へと着眼点を変え、より顕著な「男性同士の恋愛関係」を描写する漫画への追求が始まった。そこで1998年に香港初の（狭義の）「BL」サークル「H株式会社」が結成され、そこから香港本土の本格的な「BL」創作が始まった。

第5章では、今も続く同人誌即売会「コミックワールド香港」(CWHK)が1998年に成立した経緯と、その発展に伴い、2000年代に入って同人誌界でも二次創作が流行してきたことについて述べる。若い描き手の間で二次創作が流行していく一方、同人界の「氷河期」以前にすでに活躍を遂げていたベテランの同人作家はオリジナル作品に拘っていたため、90年代後半から当時の新世代同人誌の描き手が「やおい」を含めた二次創作に重きを置くことに対し、批判の声が聞かれるようになった。そこで、オリジナルと二次創作の描き手の間で論争が起こった。

第6章では、2006年に香港初の商業BL漫画「妄想少年 AMAZING!」が出版された当時の事情について述べる。2000年代に入り、「BL」文化が広がりを見せる一方、一般大衆及び一部の男性オタクには、「同性愛テーマ」作品に対する偏見が確実にあった。BLを読む女子大学生が非難された、2005年に起こった「BL清算事件」はその典型である。以前から香港は、性描写および同性愛表現がある出版物に厳しく、BLの商業出版はきわめて難しい状況にあった。その中で、香港のプロ漫画家である塵沙沙は、所有しているスーパードルフィーをキャラクターの原型として、もともとは「CWHK」で発表された同人作品『妄想少年』を基にした作品を、個人で興した出版社・果果出版を通して出版した。こうして、2006年、香港初にして唯一の「BL」商業漫画単行本『妄想少年 AMAZING!』が出版されることとなった。

以上が、本研究「香港におけるBL漫画の流入と発展」の要旨となる。本研究では、香港におけるBL漫画の受容史を初めて明らかにするとともに、それが日本の同人文化史とも共通性を持つこと、日本との時差が意外に少ないことなどを明らかにしていく。